

二葉亭四迷

私は懷疑派だ

私は懐疑派だ

私は筆を執っても一向気乗りが為ぬ^せ。どうもくだらなくて仕方がない。「平凡」なんて、あれは試験をやつて見たのだね。ところが題材の取り方が不充分だったから、試験もとうとう達しなくつて了つた。充分に達しなかつたというのは、サタイアになつたからだ。その意では^{つもり}なかつたのが、どうしても諷刺になつて了つた。

「其面影」の時には生人形を拵^{こしら}えろといふのが自分で付けた註文で、もともと人間を活^いかそうといふのだから、

自然、性格に重きを置いたんだが、今度の「平凡」と来
ちや、人間そのものの性格なんざ眼中に無いんさ。丸ツ
きり無い訳ではないが、性格はまア第二義に落ちて、そ
れ以外に睨にらんでいたものがある。一言すれば、それは色々
の人が人生に対する態度だ……人間そのものではなく
て、人間が人生に対する態度……という何だか言葉を
弄するような嫌いがあるが、つまり具体的の一箇の人じ
やなくて、ある一種の人が人生に対する態度だ、而そして
その一種の人とは即ち文学者……必ずしも今の文学者ば
かりじゃなく、凡およそ人間在って以来の文学者という意味

も幾らか含ませたつもりだ。だから今度の作では那樣そんな関係ばかりを眼に見ていて、人間を活躍させようなんぞという気もなけりや、従つて活躍もしなかつた。これが「其面影」と「平凡」とを創作した時の、私の態度の違いさ。

だが、要するに、書いていてまことにくだらない。子供が戦争いくさごっこをやったり、飯事ままごをやる、丁度そう云つた心持だ。そりや私の技倆が不足せいな故もあるうが、併ししかどんなに技倆が優れていたからつて、真実ほんの事は書ける筈がないよ。よし自分の頭には解つていても、それを口にし文にする時にはどうしても間違つて来る、真実の事

はなかなか出ない、髣髴ほうふつとして解るのは、各自めいめいの一生涯
を見たらばその上に幾らか現われて来るので、小説の上
じや到底偽うそツばちより外書ほかけん、と斯こう頭から極めて掛
っている所があるから、私にや弥々いよいよ真剣にやなれない。

併しながら、斯う云うと、私一人を以て凡すべての人を律
するようには取られるかも知らんが、そう云う心持でもな
いんだ。私一人がいけないんだね。ただ自分がそういう
心持で、筆を持つちやどうしても真剣になれんから、な
れるという人の心持が想像されない。真の文学者の心持
が解らん。だから真剣になれるという人があれば私は疑

う。が、単に疑うだけで、決してその心持にやなれぬと断定するまでの信念を持っている訳でもない。雖然^{けれども}どう考えても、例^{たと}えば此間盜賊に白刃を持つて追掛けられて怖かったと云う時にや、其人は眞実^{ほん}に怖くはないのだ。怖いのは眞実に追掛けられている最中なので、追想して話す時にや既に怖さは余程失^うせている。こりや誰でもそ^うなきやならんように思う。私も同じ事で、直接の実感でなけりや眞剣になるわけには行かん。ところが小説を書いたり何かする時にや、この直接の実感という奴が起つて来ない。人生に対するのが盜賊に追われた時の心持

になつて了う。議論から考えて見ると、人生というものが何も具体的にそこに転ころがつてゐる訳じゃない。斯うやつて御互に坐つてゐるのも亦人生に漬かつてゐるのだから、人生に対する感を持たれぬという筈もない。だから追想とか空想とかで作の出来る人ならば兎も角、私にやどうしても書きながら実感が起らぬから真剣になれない。古い説かも知らんが私の知つてゐる限りじゃ、今迄の美学者も実感を芸術の真髓とはせず、空想が即ち本態であるとしている。この空想とは、例の賊に追われたことを後から追懐する奴なんだ。そうすると小説は第二義の

もので、第一義のものじゃなくなつて来る。否いや、小説ばかりじゃない、一体の人生観という奴が私にや然そう思えるんだよ……思えると云うと語弊があるが、那樣そんな気がするのだ。どうも莫ば迦か々かしくてね。だから作をする時にや、精神は非常に緊張させるけれども、心には遊びがある。丁度、擊劍で丁々ちようちようと撃合つては居るが、つまり真劍勝負じゃない、その心持と同なじ事だ。こんな風だから、他人は作をしていねば生活が無意味だというが、私は作をしていれば無意味だ、して居おらんと大に有意味になる。この相違を来すにや何か相当の原因が無くばなるまい。

私は二十世紀の文明は皆みんなな無意義になるんじゃないかと思う。何と云っても今はまだレフレクシヨンの影響を免まぬがれていない。十九世紀で暴威を逞たくましくした思索の奴隷になつていたんで、それを弥々いよいよ脱却する機会に近づいていゝらしく見える。新理想とか何とか云い出すな、まだレフレクシヨンに捉とらわれてる証拠さ。併しさすがに以前の理想では満足出来ん所から、新理想主義になつて来たんだ。文学の方で最近の傾向はシンボリズムとか、ミステシズムとか云うのだが、イズムの中に彷徨うろついてる間うちや未だ駄目だね。象徴主義で云う霊肉一致も思想だけで、

眞実一致はして居らんじやないか。で、私は露語の所謂いわゆる ストリヤツフヌスト（身震いする）と云ったような時代……つまりこびり着いて居る思想の血を払って、新たな清い生活に入ろうとする過渡の時代のように今を思う。人生の意義は解らんという結論までにや疾とつくに達して、いらくせに、まだまだ思想に未練を残して、やはり其から蝉脱せんだつすることが出来ずに居るのが今の有様だ。文学が精神的の人物の活動だというが、その「精神」が何となく有難く見えるのは、その余弊を受けて居るんで、靈肉一致どころじやない、よほど靈が勝ってる証拠だ。だから

シンボリストでも、思想では霊肉一致だろうが、自分の存在では未だ其処までは行つて居らんよ。そんなら行き着いた先きは何うなるかと云うに、そりや想像は一寸付ちよつとかん。第二義から第一義に行つて霊も肉も無い……文学が高尚でも何でも無くなる境涯に入れば儲さてどうなるかと云うに、それは私だけにや大概の見当は付いているようにも思われるが、ま、ま、殆ほとんど想像が出来んと云つて可いいな。——ただ何だか遠方の地平線に薄ぼんやりとあかるく夜が明けかかっているような所が見えるばかりだ。

アンノーン^{アンノーン}の神、未知^{アンノーン}の幸福^{ハツピネス}——これは象徴派^{シムボリスト}のよく口
 にする所だが、あすこいらは私と同じ傾向に来て居るん
 じやないかと思うね。併し彼等はまるで今迄とは性質の
 変った思いもかけぬ神様や幸福が先きにあるように考え
 てるらしいが、私はそうは思わん。我々が斯^こうして生き
 てるのは即ち「アンノーン、ハツピネス」じやないか。
 ただ気が付かずに迷ってるだけだ。聖人は赤児の如しと
 いう言葉が其に幾^{いよいよ}らか似た事情で、かねて成り度いと望
 んでた聖人に弥々^{いよいよ}成って見れば、やはり子供の心持に還
 る。これ変ったと云えば大に変わり、変らんと云えば大に

変らん所じやないか。だから先きへばかり眼を向けるの
そもそもが抑たまの迷い。偶あしもとには足許も見ては何どうか。すると「い
 や、此儘で幸福だ」というような事がありはせんか、と、
 まア思うんだな。

私は何も仏を信じてる訳じやないが、禪ざんで悟さとを開く
 とか、見性けんしょう成仏じょうぶつとかいった趣きが心の中には有る。そ
 んなら今が幸福だと満足して、此上に社会改良も何も不
 必要かと云うに然そうでもない、大變パラドクスルになつ
 て了って……ある意味じや此儘幸福だが、他の意味じや
 不幸福だ。一見矛盾しているようだが私の心では為して居お

らん。ここが象徴派シムボリストと同じ所へ来ている証拠じやないか
と思う。だから人が文学や哲学を難有がるのは余程おく後れ
ていやせんかと考えられる。第一其等が有難いと云うな、
偽うその有難いんだ。何となれば、文学哲学の価値を一旦根
底から疑って掛らんけりや、真の価値は解らんじやない
か。ところが日本の文学の発達を考えて見るに果してそ
う云うモーメントが有ったか、有るまい。今の文学者な
ざ殊に、西洋の影響を受けて、いきなり文学は有難いも
のとして担かつぎ廻って居る。これじや未だ未だ途中だ。何
にしても、文学を尊ぶ気風を一旦壊して見るんだね。す

ると其敗滅ルーインスの上に築かれて来る文学に対する態度は「文学も悪くはないな！」ぐらいな処とこになる。心持ちは第一義に居ても、人間の行為は第二義になって現われるんだから、ま、文学でも仕方がないと云うように、価値が定ま^きって来るんじゃないかと思う。

一寸親子の愛情に譬たとえて見れば、自分の児は他所よその児より賢くて行儀が可いいと云う心持ちは、濁あかぬって垢あかぬ抜けのしリフアイソンドない心持ちである。然るに垢あかぬ抜けのした精美リフアイソンドされた心持ちで考えると、自分の児は可愛いには違ちがいが、欠点も仲々ある、どうしても他所の児の方が可い、併あし可

愛いとなる。これと同じ事で、文学にしがみ付いて、其でなきや夜も日も明けぬと云うな、真に文学を愛するもんじやないね。今の文学者が文学に対する態度は真面目まじめになつたと云うが、真面目じやなくて熱心になつただけだろう。法華ほっけ信者が偏頗へんぱ心しんで法華に執着する熱心、碁客が碁に対する凝り方、那樣そんなのと同様で、自分の存在は九分九厘は遊んでいるのさ。真面目と云うならば、今迄の文学を破壊する心が、一度はどうしても出て来なくちやならん。

だから私の態度は……私は到底文学者じやない。併し

文学が兎戯に類すると云う話と、今の話は別だよ。ただ批評をして見ると、一寸そんな事を云って見度みたくなるのだね。

私は、まあ、懷疑派だ。スケプチスト第一論理ロジックという事が馬鹿々々

しい。ローオブソート思想之法則は人間の頭に上る思想を整理アドジャストするだ

けで、其が人間の真生活リヤルライフとどれだけの関係があるか。

心理学上、人間は思想だけじゃない。メンタルエナジー精神活動力の現わ

れ方には情もあれば知もあり意もある。それを思想だけ

整理しても駄目じゃないか。成程、相等しき物は同一な

りは尤もつともの次第で、他に考えようもないが、併し「何故」ホワイ

という観念が出て来ると、私はそれに依頼されなくなる。
 心理学上の識コンシアスネス覚レフレクティブアクションについて云って見ても、識覚に上ら
 ぬ働き（アンダー、コンシアス、ウォーク）が幾らある
 か知れぬ。反射的動作なぞは其卑近の一例で、斯こんな
 心持ちがする……云々と云う事も亦また其働きだ。だから識
 覚の上へのぼって来る思想だけじゃ、到底人間全体の型
 は付けられない。じゃ、何どうすりや好いかと云うに、矢
 張りそりや解らんよ。ただ手探りでやって見るんだ。要
 するに人間生きてる以上は思想を使うけれども、それは
 便宜の為に使うばかり。と云う考えだから、私の主義は

シンキング、フオーワ、シンキング
 思想の為の思想でもなけりや芸術の為の芸術でもな
サイアンス、フオーワ、サイアンス
 く、また科学の為の科学でもない。人生の為の思想、
 人生の為の芸術、は 将た人生の為の科学なのだ。

ライフ 人生、ライフ 々々というが、人生た一体何だ。一個の想ノーシヨン念

じやないか。今の文学者連中に聞き度いのは、よく人生
 に触れなきや不可いかんと云う、其人生だ。作物を讀んで、こ
 りや何となく身に浸しみるとか、こりや何となく急所に当
 らぬとかの區別はある。併しそれが直ちに人生に触れる
 触れぬの標準となるんなら、大變輕卒のわけじやないか。
ひきしま 引緊った感を起させる、起させぬの別と、人生に触れる

触れぬとの間にや、大なるギャップが有りやせんか。私
はどうも那樣そんな気がするね。触れる云々は形容詞に過ぎん
ように思う。哲学上の見解から小説と人生との接触を見
たんではないらしい。にも係らず其無意味のことに意味
をつけて、やれ触れたの、やれ人生の真髓は斯こうだのと
云う。一片の形容詞が何時の間にか人生観と早變りをす
るのは、これ何とも以て不思議の至りさ。

いや、何時のまにか私も大氣焰を吐いて了って。先まず
ここらで御免を蒙ろう。

(明治四十一年二月)

日本文学電子図書館

私は懐疑派だ

著 者：二葉亭四迷

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 1

「政治小説・坪内逍遙・二葉亭四迷集」

筑摩書房

昭和46年2月5日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館